

追いついた松岡に話しかける。

「葉山って、そんなに料理が上手かった？」

「上手だったんじゃないかな。カレーとかグラタンとかよく作ってくれたし」

少し間をおいて「俺もカレーだけだったら自信あるけど」と松岡がぼつりと呟いた。

「就職して最初のうちは自炊してたからさ。魚介類をたっぷり入れた海鮮カレーとか、きのこメインでチーズを入れたやつとか」

「カレーにチーズを入れるの？」

「けっこう美味しいよ。何人かに食べさせたけど、評判よかったし」

「へえ…」

きのこのチーズカレー。ものすごくこってりしてそうだ。

「今度寛末さんがうちに来た時に作ってみようか」

「あ、うん。食べてみたい」

返事に勢いがありすぎたのか、松岡はクツと笑う。子供みたいな自分が恥ずかしくて、寛末は顔を伏せた。

「寛末さん、面白いなあ」

松岡はまたフンフンと鼻歌を歌い、すぐに止める。駅に着いた。松岡は右手の手袋を返し「じゃあまた」と右のホームへと歩いていく。寛末は反対側なので左のホーム。寛末の乗る電車が先に来て、向かいのホームを見ると松岡が手を振っていた。

カーブを曲がるとホームはすぐに見えなくなり、寛末は空いている椅子に腰掛けてフツとため息をついた。

松岡洋介とは楽しく食事ができる。学生時代ならいざ知らず、社会人になってからこれほど気の合う男は初めてだった。週に一、二度は一緒に夕食を食べ、隔週のペースで週末を共に過ごす。適当にドライブしたり映画を見たり、どちらかの部屋でぼんやりとDVDを見て過ごすこともあった。穏やかに居心地のよい時間を寛末はとても気に入っている。

去年のクリスマス、自分の誕生日に松岡と食事をし、誕生日プレゼントをもらった。いいと遠慮しただけ「高いものじゃないから」言われた。開けてみると、青い文字盤が綺麗な時計だった。シンプルで使いやすいそうで、もらえないと言っておきながら一目で気に入ってしまった。

「時計をなくしたって前に聞いてたから」

松岡は小さな声でそう言っていた。食事は美味しく、プレゼントも気に入って、話も弾んで楽しい誕生日だった。そのせいだろうか、寛末は店を出て帰る時間になっても、もう少し松岡と一緒にいたいと思った。だけどクリスマスに週末が重なって、近くの店はどこも混雑していた。

「うちで飲んでいく？」

誘ったのは自分からだった。途中のコンビニで缶ビールと缶チューハイを買って、アパートで飲み直し

た。何のことを話したか忘れたけど、おかしくてよく笑った。そういえば、お返しをしないといけないと思って松岡の誕生日を聞いたのに、教えてもらえなかった。「俺は別にいいから」とはぐらかされた。

話をしている間に終電の時間が近づいてきて「どうしようかな」と時計を見ていた松岡に「泊まっていけばいいよ」と言ったのは自分だった。…その後で、キスしてきた松岡を衝動のままに突き飛ばした。

あの時のことはメールで互いに謝った時点で終わったと思っていたけれど、小さな変化があった。松岡から毎日送られてくるメールの回数が目に見えて減った。あれのせいかなと気になったけれど、メールが全くこなくなったらわけではなかったし、お互い年末は忙しかったので、そのせいかもしれないと思っていた。

年末年始は毎年田舎に帰るので、寛末がこちらに戻ってきたのは一月三日、松岡に会ったのもその日だった。クリスマスの日から顔を合わせてなかったたので、ほぼ十日ぶりだ。

駅前は混雑するだろうからと、神社の近くにある公園で昼過ぎに待ち合わせた。約束した時間の十分前に公園に着くと、松岡は先に来て待っていた。

あの時の松岡の顔は今でも忘れられない。口は笑いの形なのに、まるで怖いものを見るような目をしていただけからだ。

「あ、久しぶり」

そう言う声まで心なしか震えている気がする。

「あ、うん。待った？」

「全然。俺もさつき来たところだし」

寛末は「寒いから、温かいものでも飲んでから行く?」と、松岡を近くのコーヒーショップに誘った。店の中は着物姿の女の子がちらほら見える。

「松岡さん、お正月は何してた?」

コーヒーには口をつけず、カップを両手で握り締めていた松岡が、ピクリと震えるように顔を上げた。

「あ、うん。家でダラダラ…」

「僕と一緒にだな。松岡さんは外でスポーツをしているようなイメージがあるんだけど」

「俺、寛末さんをそういう遊びに誘ったことないだろ」

「僕が苦手だから、遠慮してるのかなと」

松岡が小さく笑った。

「もともと家にいるのが好きなんだよ。仕事の時はいつも外を走り回ってるからさ」

妙に納得してしまった。営業はとにかく忙しくて、体を壊す人も多いと聞く。以前上司だった福田は営業は楽な仕事だと言っていたが、そうではない気がしていた。松岡は靴が一年もたないと言っていた。総務ではまず考えられない。

「温泉とか好きなんだよね。ただのんびり風呂に入って、上げ膳据え膳で何にもしないのとかさ」

「僕も温泉は好きだよ」

それなら…と言いかけて、松岡が不自然に口を喋む。どうしたんだろうと思ったものの、寛末は続けた。

「学生の頃は、近くの銭湯によく通ってたな。アパートにも風呂はついてたんだけど、無性に大きな風呂に入りたくなる時があったから」

「：銭湯と温泉は違うんじゃないか？」

指摘されて気づく。

「そういえばそうかな。大きい風呂はどれも同じような感じがするから」

大雑把すぎ、と松岡が笑う。ようやく頬から強張りが取れた。それからしばらくして店を出て、初詣に行った。帰る頃には、いつもの元気な松岡に戻っていた。

その日を境に少なくなっていたメールが元に戻ったし、夕食や遊びにも以前のペースで誘われるようになった。松岡は何も言わないけど、クリスマスマスの日にキスしてきたことを、相気にしてきたようだった。：電車がガクンと大きく揺れて、アパートの最寄り駅に着いた。駅のホームに降りた途端、ワッと寒さに全身を取り囲まれる。マフラーの中に鼻先を埋めるようにして肩を竦め、足早に歩く。時間が遅いせいか、すれ違う人も少ない。

アパートの近くの、庭木が鬱蒼としてる一軒家の前を通り過ぎると、ワンツと犬に吠えかかられて思わずビクリと背中を震わせた。いつものことなのに慣れなくて、フッと笑ってしまう。呆れるほど繰り返し返される日常。この感じが自分は好きだ。それ以上は求めてない。松岡との関係も、これから先などなくていい。今のままで満足している。

人と争うのが嫌だから、自分はあまり口答えをしない。そうすると「こいつは何を言っても大丈夫だ」と勘違いする輩が出てくる。そして他の人であれば言葉を選ぶものを、直接的に言われるようになる。決して傷つかないわけではないのに。そして一度ついてしまった相手へのイメージは変えることが難しい。自分が会社でも誰かの捌け口的な位置に立ってしまうのは、言うべき言葉と言わなくてもいい言葉を選べ

ないとところに根本がある。もとはといえば、自分が悪い。わかっているけれど、どうにもできない。：遠慮のない物言いは同性に多い。女の人はもう少し遠慮してくれる。

松岡もはつきりとものを言う人だけど、こちらでも納得できるし嫌な思いをしたことはない。自分にもすぐく気を使ってくれているのがわかる。：優しい男だと思う。

もし松岡が困っていると云ったら、助けてあげたい。できることなら何でもしてあげたいと思う。けど正直な話、寛末は松岡を大切にしたいと思っても、彼が江藤葉子だった時のように体の関係を結びたいとは思わなかった。

付き合っていた人と別れて、好きになれるかもしれないと逃げる松岡を追いかけて、答えを保留にして出た結論がこれだ。だけど友達のままでもいいと言えない。松岡が自分を好きだと見ていてわかるからだ。いつも優しい友達でいてくれるけれど、ふとした瞬間に見せる眼差しに燻火おきびのような熱を感じる。

このまま松岡の熱が冷めてくれないだろうか。恋愛の熱だけ冷めて、友達としてずっと付き合っていけないだろうか。互いに結婚しても、たまに誘い合って一緒に酒を飲むような、そんな関係に行き着けないだろうか。

寛末は暗い空に向かってため息をついた。白い息は散り散りになって消え、吸い込んだ冷たい夜気が少しだけ肺に痛かった。